

「地域に暮らすアーティストが子どもたちとであう〜  
『とりで・アートスタート』プログラム」事業

アーティストと子どもたちが会う機会の提供を通じて  
多様な価値観や表現の可能性を探る「こどもプログラム」

異なるものの見方や多様な価値観を提示してくれるのがアーティストであり、彼らが生み出すアートである。アーティストと子どもたちが会うことで、前者は作品のアイデアや創作への刺激を受け、後者は表現のおもしろさや自由な発想を体験することができる。茨城県取手市を舞台にアートを媒介とした興味深いプロジェクトが展開されている。

取手市内の小学1年生が全員参加する  
作品展のサポートにアーティストを派遣

少し大げさな言い方をすれば、取手市内の子どもたちにとって、小学校に入学した年はアーティストとしてのデビューの年でもある。1999年から取手市では市内の小学1年生全員による作品展「いちねんせいのおひんてん」が開催されている。これは毎年、あるテーマのもとに制作した作品を優劣をつけることなく一堂に展示するもので、昨年は「いつもいっしょ」をテーマにした約800人の小学1年生の作品が、とりでアートギャラリー「きらり」で12月6日～23日まで展示された。

この作品展のユニークな点は、すべての作品にナンバーが付されていて、来場者はくじによって引き当てたナンバーの作品の感想を「お手紙」という形で書かなくてはならないということで、あとで子どもたち全員に届けられる仕組みになっている。それはそのまま、小学1年生という、いわば社会の入口に立った子どもたちが、自分の作品が他者に届くこと、それによって人とのつながりやコミュニケーションが成立することを学ぶことである。



チラシを作成し、作品展を告知

「この展覧会の作品制作をサポートするため、私たちは毎年、10人前後、取手市内在住や取手市にゆかりのあるアーティストを申請のあった小学校に派遣しています。昨年は8校に9名のアーティストを派遣しました。そのアーティストが独自にテーマを解釈して作品制作のお手伝いをするため、できあがる作品の形態は絵画、立体物、学年全員の共同インスタレーション、体験型作品など、実にさまざまです」と語るのは、NPO法人取手アートプロジェクトオフィスの金子千恵さん。

取手アートプロジェクト(TAP)は1999年から取手市民、取手市、東京藝術大学の3者が共同で行っているアートプロジェクトで、若いアーティストの創作発表活動を支援し、市民に広く芸術と触れ合う機会を提供することで、取手が文化都市として発展していくことを目指している。その実施本部が、2010年にNPO法人として設立された取手アートプロジェクトオフィスである。



市内の1年生全員による作品展「いちねんせいのおひんてん」



市内の小学校にアーティストを派遣する「オリジナルワークショップ」

助成によって実現したワークショップと  
未就学児を対象にした新たなプロジェクト

この作品展に加え、会期初日には「TAP こどもプログラムフォーラム」として、顔博士として知られる原島博さん、漫画家のしりあがり寿さんをゲストにした「顔博士とマンガ教授のおもしろ顔教室」が開催された。作品展、フォーラムともAJOSCの助成を受けて実施された事業だが、このほかにも2校の小学校にアーティストを派遣して「オリジナルワークショップ」が行われた。

「ひとつは6年生を対象にしたもので、特別ではないが大切な日常の記憶を連旗という形に表現するインスタレーション『きおくのはたをおく』、もうひとつは5～6年生が学校の創立40周年を記念してオリジナルの合唱曲を作る『作曲工場うたづくり研究室』というものでした。合唱曲作りのワークショップは地元紙などでも報道され、完成した曲に関係者一同、感動しました」と、金子さん。

さらに今回の助成事業として行われたのが、未就学児とその保護者を対象としたプロジェクト「たぶたぶクラブ」である。これは、「わくわく工作・カラフルエコバッグをつくる」、「わいわいお絵かき・ねんど絵の具であそぼう」、「のびのび体操・からだでおしゃべりしよう」と3回に分けて開催されたワークショップで、それぞれ10組の親子を定員に、3名のアーティストが講師を務めた。

「今回が初めての試みでしたが大好評で、申し込み開始直後にすぐに定員がいっぱいになりました。ご自身もお子さんがいらっしゃるアーティストに、親の立場からワークショップのテーマを考えてほしいとお願いしました。保護者は30～40代の方が多く、なかには祖母や祖父と一緒にという子どももいました。小さな子どもがいるとどうしても家に引きこもりがちになるので、外に出る機会を提供したかったことと、家のなかでもちょっとした工夫で何で

担当者より



今後の活動のための  
一歩になりました。

取手アートプロジェクトオフィス  
金子千恵さん

助成という財源があったおかげで、ほぼ計画通りに事業を実施できました。未就学児を対象としたプロジェクトでは、保育士やママさんサークルなどの子育て支援を行っている方々とのつながりもでき、次のステップへの一歩となりました。今後、さらにこどもプログラムを充実させていきたいと考えています。

も遊びになることをアーティストと子どもが接する姿を見て気づいてほしいという願いがありました。参加者からは、家ではできないことができた、このような催しを定期的・恒常的に開いてほしいという声を多くいただきました。そう振り返る、金子さん。アーティストと子どもたちが会えるTAPの「こどもプログラム」は、さまざまな可能性を開いていくきっかけとなるに違いない。



多くの親子が集まった「顔博士とマンガ教授のおもしろ顔教室」



未就学児とその保護者を対象としたプロジェクト「たぶたぶクラブ」

